



監督・脚本・編集＝ガス・ヴァン・サント／出演＝アレックス・フロスト／エリック・デュールン／ジョン・ロビンソン
 (東京テアトル、エレファント・ピクチャー配給／2003年アメリカ映画／81分)

2003年のカンヌ国際映画祭で、史上初のパルムドール賞と監督賞を W 受賞した話題作。その題材は、コロラド州の高校で現実起こった2人の高校生によるものすごい銃の乱射事件。しかし映画は、高校生の日常生活とその乱射事件を淡々と描いていくのみ……。監督の解釈を示さないことによるメッセージ性の狙いもわからなくはないが、どうも私にはいまひとつ……。また『エレファント』というタイトルの意味もヒネリすぎ……？

🎬 題材は現実の事件

この映画の題材は、1999年4月にコロラド州コロンバイン高校で実際に起こった銃の乱射事件。もちろん私は、実際の事件の内容は知らないが、この映画で描かれているのはアレックス（アレックス・フロスト）とエリック（エリック・デュールン）の2人の高校生がネット（www.guns.usa というウェブサイト）で手に入れたライフル、散弾銃、ピストルをたくさん身につけて、周到な計画の下に校内に乗り込み、校長以下を手当たり次第に射殺するという残忍なもの。この事件の特徴は、この実行犯の2人が、日頃からの非行少年ではなく、ごく普通の高校生だったということ。なぜ2人は突然、こんな行動に走ったのだろうか……？

🎬 この映画の監督のスタンスは……？

こんな社会性のある少年非行の事件を題材とする場合、問題はその視点と切り

口。そしてそれは監督が決定するものだ。日本のテレビでの「ワイドショー」番組で、昨今やたら目につくのはコメンテーターという役柄。司会者からちょっとした問題提起を受けて、したり顔で「解説」したり、意見を述べるという役柄だが、そのほとんどは「出来レース」……？ また、そのどれを聞いていてもその内容は乏しく、薄っぺらな表面づらしかしゃべっていないことが多く嫌気がさしてくる。そんな日本のワイドショーで、この銃の乱射事件を取り上げれば、

「こんな子供を生み出した学校や家庭そして社会が悪い！」

「なぜ、もう少し早く危険の前兆を察知してやれなかったのか！」

「思春期の子供の微妙な気持を大人がわかってやるのが大切！」

「同じような事件を繰り返さないため、この事件の本質を学ぶことが大切だ！」
等々の決まりきったような「解説」がくり返されることだろう。

しかし、この映画の監督であるガス・ヴァン・サントは、あえて自分流の解釈を何も示さなかった。したがって、この映画の前半は、この高校で生活をし学んでいるごく普通の高校生たちの日常を1人ずつ描くだけのもの。その中には、もちろん実行犯のアレックスとエリックの日常生活も含まれている。そして、空に暗雲がたちこめた後に始まる後半は、ただ校内における2人の乱射の様子とそれによる惨劇の様子をカメラが追っていくだけ。そこには、なぜ？ どうして？ 何のために？ という疑問は何も示されず、ましてやその答えは何も示されていない。パンフレットの中で監督自身が、「特に何かを説明したいわけじゃないんだ」と述べるように、ホントにこの映画では何の解釈も示されていない。しかし私はどうもその点に違和感を覚えるし、それだから、この映画はつまらないと思ってしまうのだが……？

✿ カンヌ映画祭でW受賞だが……？

この映画は、2003年カンヌ国際映画祭でパルムドール賞と監督賞をW受賞した話題作。ガス・ヴァン・サント監督は、『グッド・ウィル・ハンティング 旅立ち』（97年）でアカデミー賞最優秀監督賞にノミネートされた監督だし、『誘う女』（95年）、『サイコ』（98年）、『小説家を見つけたら』（00年）等、多くの有名作品を生み出している監督だから、当然私は大きな期待をもってこの映画を観た

のだが……？ 結論を言うと、その期待は大きく裏切られてしまった。

映画の前半が描くもの

前半は、最初にジョン（ジョン・ロビンソン）が登場する。続いて男の子としては、① 写真家を目指し、いつも写真を撮っているイーライ（イライアス・マッコネル）や、② 女子に人気者のアメフト部員のネイサン（ネイサン・テイラー）の生活ぶりが淡々と描かれる。

そして女の子としては、① うわさ話やダイエットの話題ばかりの仲良し3人組のジョーダン（ジョーダン・テイラー）、ニコル（ニコル・ジョージ）、プリタニー（プリタニー・マウンテン）や、② 自意識過剰なミシェル（クリスティン・ヒックス）、そして、③ ネイサンの彼女のキャリー（キャリー・フィンクリー）や、④ ジョンのガールフレンドのアケイディア（アリシア・マイルズ）の生活ぶりが同じく淡々と描かれる。

ちょっと面白いのは、「同性・異性愛会」（Gay-Straight Alliance meeting）というクラブ。パンフレットによれば、これは「学生が運営するクラブ、特に高校に多い。生徒同士が性的問題について安心して話し合い、助け合うための場であり、ホモフォビア（ホモセクシュアルへの偏見）を取り除くための会である」とのこと。ここでのディスカッションの様子もかなり詳しく描かれている。しかしはっきり言って、これを観ていてもかなり退屈。

映画の後半は……？

そして、前半とは一転して後半は激しい画面になるものの、後半も、アレックスとエリックの2人が校内を歩き回って銃を乱射するシーンが続くだけ。またアレックスとエリックが落ち合った後、アレックスがエリックを撃ち殺すのだが、これも一体なぜなのか、サッパリわからない。そして前述のように、この映画は何を主張したかったのかを明らかにしないまま、静かにジ・エンドとなっていく……。一体これは何なのだろうか……？

🎬 なぜジョンが主演扱い？

この映画の「顔」として売り出されたのは、黄色いTシャツを着た金髪のジョン・ロビンソン。彼は映画の最初に登場するが、その役柄は酔っぱらった父親の運転のおかげで遅刻し、校長から怒られるだけのもの。また後半は、アレックスとエリックが大きなバッグを持って校内に入っていくのを見て、周りの人たちに校内に入るのを止めるように声をかける役を演ずるが、言ってみればそれだけのこと。だから、なぜ、このジョン・ロビンソンがカンヌ映画祭で一夜にして今年の顔になったのか、私には不思議でならない。

🎬 本来の2人の主演のパーソナリティは……？

この映画の本来の主演は、銃を乱射した実行犯であるアレックスとエリックの2人のはず。しかしこの映画からは、この2人の内面はよくわからないし、犯行の動機も全くわからない。アレックスは内向的な性格で、ちょっといじめられてはいるものの、そんなひどいじめではない。アレックスが好きなのはピアノと絵画。その親友がエリックだが、これも内向的な性格。コンピューター・ゲームで次々と画面に出てくる敵を楽しそうに(?) 撃ち殺しているが、これくらいのこととは今どきの若い子なら誰でもやっていること。こんな性格が、犯行の動機になるとは到底思えない。

この2人は、いよいよ犯行着手の前に、2人でシャワー室に入り、これまで経験したことのないキスをするが、これも一体何のことやら……？ パンフレットには、「キスも知らない17歳が、銃の撃ち方は知っている」と思わせぶりに書いているが、そんなバカな……？

🎬 『エレファント』というタイトルも趣旨不明

パンフレットによると、『エレファント』というタイトルは、「盲目の仏教僧侶数人が、象に触った場合、自分の手で触れた部分の印象しか語りことができず、物事の全体像を見ることができない」というお話に由来するものと説明されているが、そのお話とこの映画の内容がどう結びつくのか、私には全く理解できな

い。思わせぶりな感じがするだけで、何のインパクトもないタイトルだと私は思うのだが……。

私と正反対の評価も……

以上のように、この映画についての私の評価は非常に厳しいもの。しかし、日経新聞の2004年5月6日付夕刊に掲載された映画評論家中条省平氏の「息詰まる映像で悲劇迫う」と題された評論は、この映画を絶賛している。すなわち、①「彼らが高校の廊下や教室ですれ違うスケッチを積み重ねるのだが、その手法が鮮烈をきわめる」、②「なかでも素晴らしいのが、サウンドの構成だ」、③「後半、乱射事件を起こすことになる張本人が判明し、悲劇に至る過程では、静かな画面に、息づまる緊張感がみちてくる。その高圧的なスリルには吐き気さえ催すほどだ」等々。

これほど人によって1つの映画の評価が異なるのも珍しいが、さてこの映画を観たあなたはどっち……？

2004(平成16)年5月6日記

ミニコラム

少年法と刑事罰のあり方を考える

日本ではそれまで、「16歳以上」とされていた刑事罰対象年齢を「14歳以上」に引き下げたことを柱とした改正少年法が2000年10月成立し、翌年4月施行された。これは、①1997年、神戸市でおこった連続児童殺傷事件（14歳）、②2000年2月、東京都江東区でおこった「夢の島」強盗殺人事件（15歳）等を契機としたもので、1948年に制定された少年法の「保護主義」の理念をどこまで貫徹すべきかが根本的な問題点。ところがその後も、2003年5

月には、長崎市で4歳の幼稚園児が殺された事件で補導されたのは、12歳の男子生徒。刑罰法令に触れる行為をした14歳未満の少年には刑事処罰はなく、「触法少年」として保護処分の対象となるだけ。

『エレファント』に登場する少年たちは、17歳の高校生。国によって少年犯罪の扱いは異なるものの、この事件は弁護士私の目からみても、あまりにもあまり。「刑事処罰相当!」と叫びたいと思うのだが……。